



あるじでえ

No.411

世田谷区教育委員会 民家園係

〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03(3709)6959

平成15年3月31日 発行

平成29年3月 増刷

か じ どう ぐ 鍛 冶 道 具

はじめに

農業が社会の中心だった時代、農具の生産・修理を行う鍛冶屋はなくてはならないものでした。かつて鍛冶屋は多くのムラに存在していました。次大夫堀公園民家園のある喜多見にも最近までいました。

平成13年度に民家園で行われた企画展「鍛冶の技と世界」において、民家園内に鍛冶小屋が復元されました。そこには喜多見の鍛冶屋であった広田氏から寄託された数多くの鍛冶道具が展示されています。

さて、鍛冶屋の道具は多種多様です。それこそ作られる製品の数だけ道具があると言っても過言ではありません。

昔、鍛冶屋にとって重要なカナトコは、鍛冶屋の修行を成し遂げ、なんきほうこう年季奉公^{註1}を終え、独立するときに師匠から渡されたそうですが、その他の道具は独立するまでに一通り自分で作っていました。このように自分の手足の代わりとなって使う道具が作れないうちは、一人前の鍛冶屋として認められませんでした。

今回、今ではなかなか見ることが出来なく

なった鍛冶道具の数々を、広田氏から寄託された道具を中心に紹介していきたいと思えます。

ホド (民家園設備)

道具というより場所を指します。火をおこし、ファイゴから送られてきた風を利用して燃料を燃やし、鉄を焼く場所です。火の中からのものを生み出すところとして、鍛冶屋では神聖な所とされています。燃料は時代とともに変化していきましたが、主に炭を使用していました。特に松炭は火力が強く火持ちが良かったため火造り^{註2}に向いており、鍛冶屋ではよく使われていました。昭和にはいとより安く手に入るコークスが主流になっていきました。

ホドの形態は、あらかみだ荒木田^{註3}で壁を作り、そこに直接送風管(羽口)を差し入れて火をおこす「横吹ホド」が一般的です。民家園のホドは地面に鉄の箱を埋め込み、そこに送風管

註1 鍛冶修行の最後に行くお礼奉公

註2 鉄を熱して、だまかに製品の形に整えること

註3 田の土で、古民家の土壁にも使われている

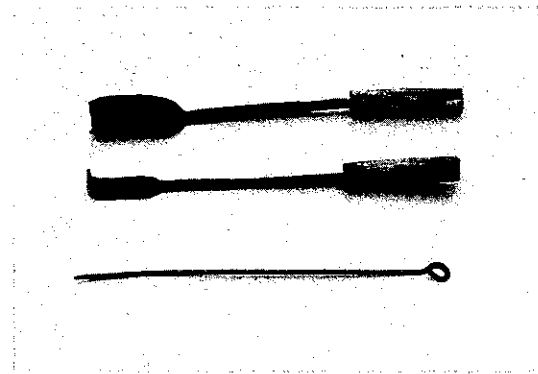
を差し入れて下から風を吹き上げる「箱ホド」を採用しています。これは強い火力が得られること、ホド全体に平均的に火がおきること、手入れのしやすさなどの理由から使用しています。



写真① ホド

ホドカキ・ホドツキ・ジュウノウ (広田氏寄託)

これらの道具はホドで使われます。ホドカキはホドに入れた炭を掻き出すのに使い、ホドツキはホドに火が入っている時に炭をかき混ぜて空気を入れたり、ホドの底にある空気穴にゴミがつかまらないように突いたりするのに使い、ジュウノウはホドに炭を入れるのに使います。どれも、火造りを行うにはなくてはならない道具です。



写真② 上からジュウノウ・ホドカキ・ホドツキ

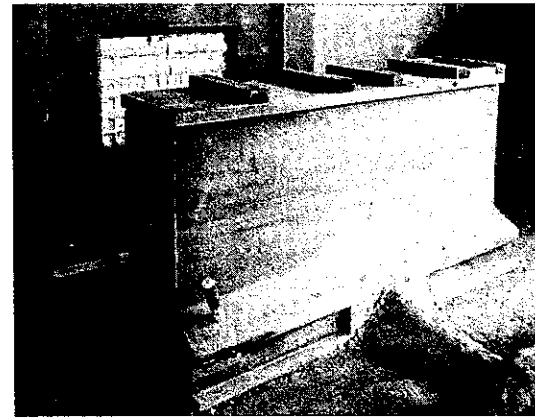
ファイゴ (民家園収蔵民具)

ホドに風を送り、それによって火の強さを調節する道具です。ファイゴは形こそ違うものの、その存在は日本書紀にも見られます。民家園で使われているようなファイゴを箱ファイゴと言います。この箱ファイゴが最初に確認されているのは鎌倉時代からです。もっともそのころの絵図に描かれている箱ファイゴを見ると、外にせり出している風回廊（押し出された風を集めてホドに送るところ）の部分がないただの立方体の箱でした。

内部はポンプのように空気を押し出す仕組みになっています。そして空気を押し出す板には動物の皮、特に狸の皮が張られています。これは空気の押し出しを良くすると、滑りを良くしてスムーズに風を送り出す役割があります。

また、昭和に入るとファイゴをよりなめらかに動かすために、ファイゴの底にガラスを入れるようになりました。鍛冶屋では足吹きといって足でファイゴを吹くやり方があります。手よ

り力が入らないため、よりスムーズに動くことが必要不可欠だったからです。



写真③ ファイゴ

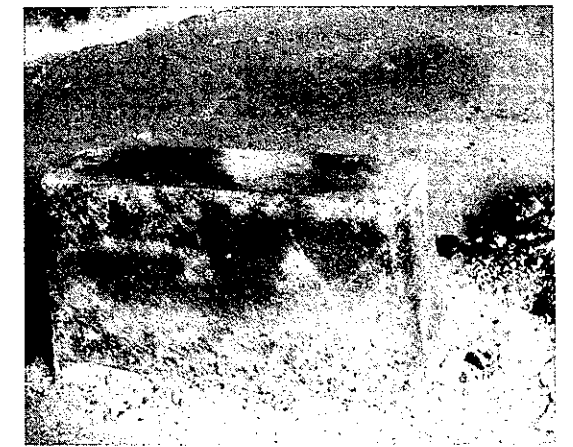


写真④ ファイゴ内部

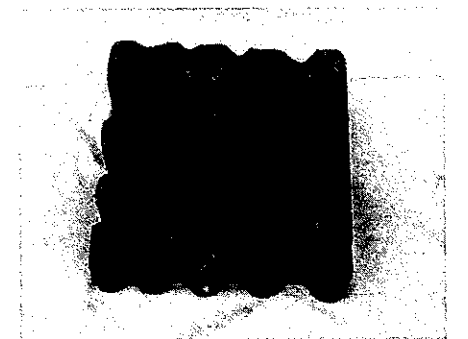
カナトコ (広田氏寄託)

焼いた鉄を叩く台です。カナシキとも言います。多くは地金の台に鋼を鍛接したのですが、中には全て鋼で作られたものもありました。民家園で使われているのは地金と鋼を鍛接したものです。

その他にも後述するトリグチやカツラハリを立てる台として使用されたハチノスドコと呼ばれるカナトコなどもあります。



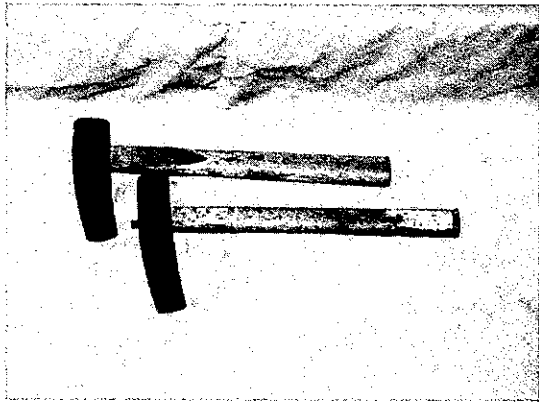
写真⑤ カナトコ



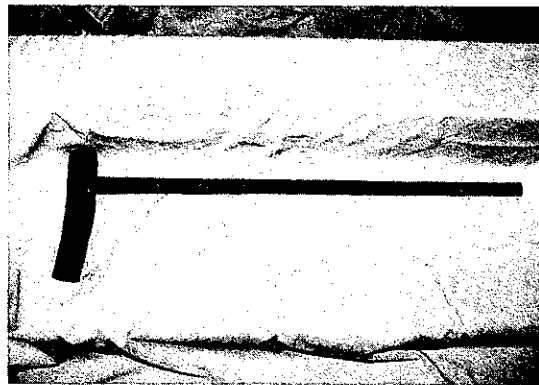
写真⑥ ハチノスドコ

イレヅチ (広田氏寄託)

鉄を叩き、のばし、形を整える道具です。作るものによってイレヅチの大きさが違い、主にヨコザ^{註4}が一人で使うコツチと、サキテ^{註5}が両手で使うオオツチなどがありました。これらを総称してイレヅチと呼んでいます。



写真⑦ コツチ

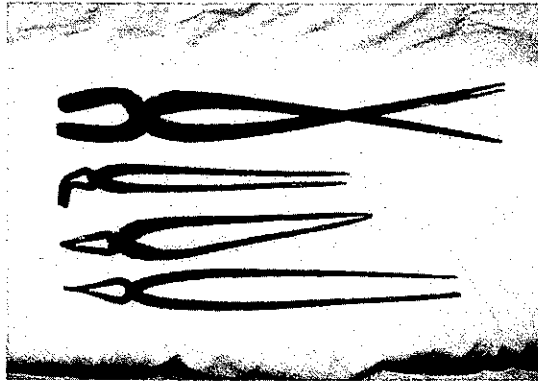


写真⑧ オオツチ

ハシ (広田氏寄託)

焼いた鉄を扱うときに、素手で鉄をつかむことは出来ません。その指先代わりに使われるのがハシです。ハシは形状から丸ハシ、小ハシ、平ハシ、大ハシの4種類に分類されます。その中で更に作るものの形態や大きさによって様々な形がありました。

一軒の鍛冶屋で最低10本以上のハシが必要でした。特殊な製品を作るときは、まずそれにあつたハシを製作してから製品作りに入ったそうです。



写真⑨ ハシ

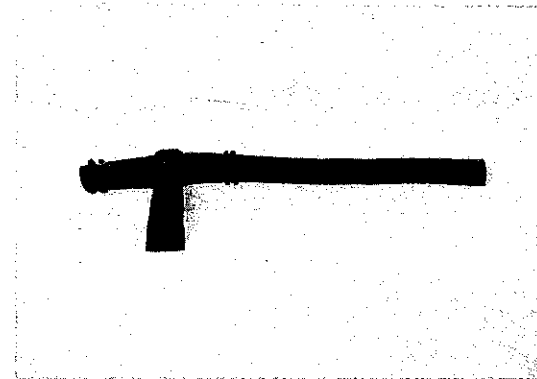
タガネ (広田氏寄託)

タガネとは鉄を切る道具、又は文字などの刻印を入れる道具のことを指します。

前者は使用用途により名称が様々でした。中でも大型のものでは斧に似ていて、柄にカマツカという木が使われています。柄の先端の中央を割いてその中に刃の部分を入れ込み、割れ込みの両端を鉄の棒で締め上げて刃が落

ちないようにしています。この形状は通常サキテがいるときに使用され、より正確に鉄を切り落とすことが出来ました。又、一人で使用するオトシと呼ばれるものもありました。これはカナトコの上に刃をのせ、棒で支えて使用しました。

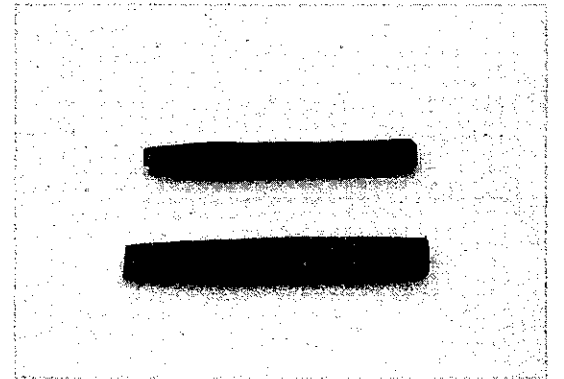
後者も打つ文字の大きさなどによりメウチタガネと呼ばれていました。



写真⑩ タガネ



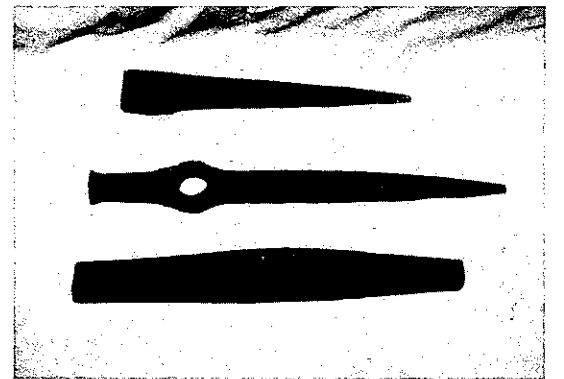
写真⑪ オトシ



写真⑫ メウチタガネ

カツラハリ (広田氏寄託)

カツラ^{註6}を作るのに使われました。まずカツラハリをハチノストコに立て、そこに鉄板を巻き付けるようにして作ります。カツラの形状によってカツラハリも丸いものや四角いものがありました。



写真⑬ カツラハリ

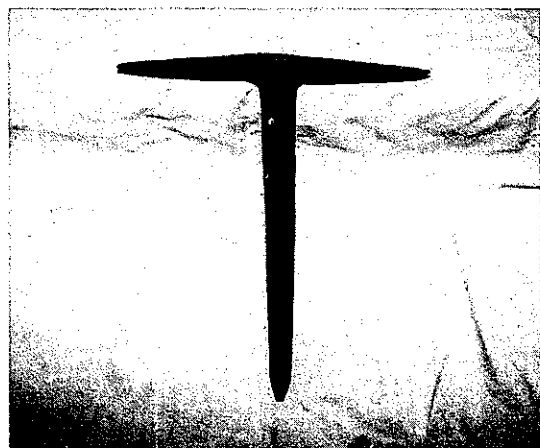
註4 サキテに指示を出す人。親方になる

註5 ムコウウチともいい、ヨコザの指示に従ってイレヅチを振る人。主に修行中の弟子になる

註6 柄と刃の部分をつなぐ鉄輪、農具などによく使われる

トリグチ (広田氏寄託)

カナトコのすぐ脇に立てたりハチノスドコに立てて、鉄材を曲げたり切ったりする台です。形が鳥の口に似ているところから付けられた名前です。ツルノクチと呼んでいる鍛冶屋もあります。カツラハリでは作れない大きなカツラやタガを作るのに使われました。



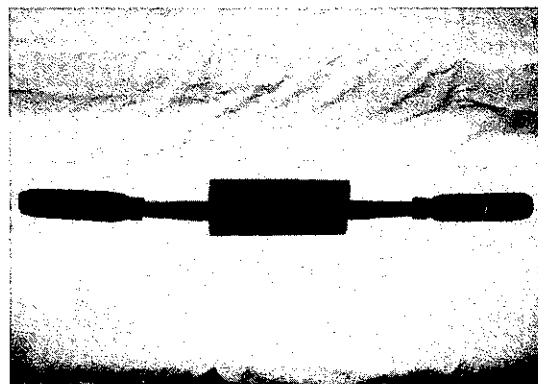
写真⑭ トリグチ

セン

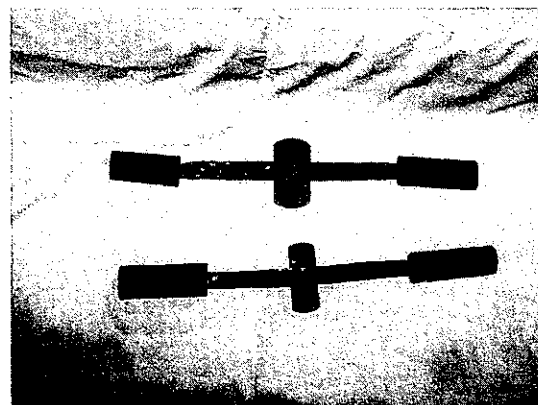
(広田氏寄託 (大型)、民家園備品 (小型))

鉄の表面を削る道具です。火造りの後の荒削りやその後の仕上げにも使用しました。刃の両側に付いている取っ手を持ち、製品をマンリキなどに挟んで削っていきます。刃の大きさなどによって数種類に分けられ、代表的なものに「トンボセン」「ムラスキ」「タケセン」などがあります。

センは刃を当てる角度が難しく、それぞれの製品に合わせて形良く削るには熟練した技が必要です。



写真⑮ セン (大型)

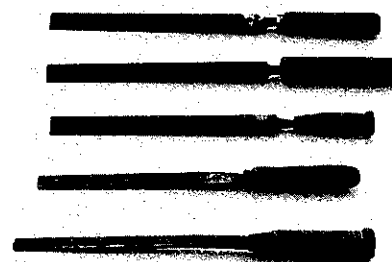


写真⑯ セン (小型、ムラスキ)

ヤスリ (民家園備品)

購入することもあります。基本的に鍛冶屋は自分たちで作ります。使っている段階によって名称と使い方を変えていきます。作りたてのものを「オロシタテ」、ある程度使い込んで目が減り始めたものを「ツカイナカ」、使い込んで目が無くなってきたものを「オワリカケ」と呼んでいます。「オロシタテ」は粗目、「ツカイナカ」は中目、「オワリカケ」

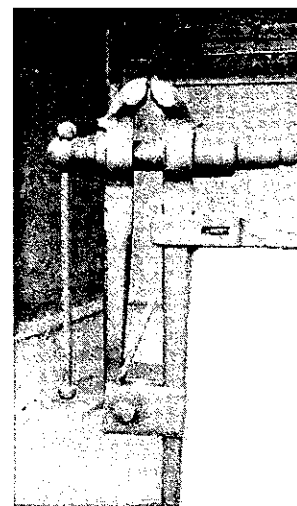
は細目として使われています。鍛冶屋ではヤスリに限らずどのような道具も最後まで大事に使っています。



写真⑰ ヤスリ

マンリキ (広田氏寄託)

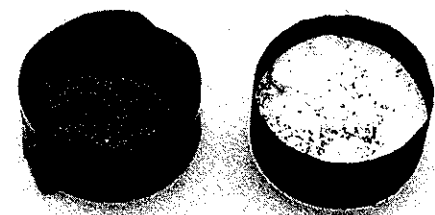
鍛冶で使われるのは立ちマンリキと呼ばれるマンリキで、木の切り株 (民家園はケヤキの切り株) などに設置されています。ヤスリ掛けやセン掛けの時に製品を挟んで固定するのに使用します。立った姿勢で作業を行うので、力が入る高さに調節すること、又動かないようにしっかり固定しておくことが重要です。



写真⑱ マンリキ

タンセツザイ (民家園備品)

鋼と地金を合わせるときに使われる薬品です。鉄臘とも言われ、接着剤の役割を果たします。基本的には、珪砂と鉄粉を混ぜたものですが、鍛冶屋によってその調合の比率を変えたり、他のものを混ぜるなどして独自のものを作り、それらの内容は秘伝としてよその人間には明かすことはほとんど無いそうです。民家園で使用しているタンセツザイは鋼材屋で市販されているものを購入しました。

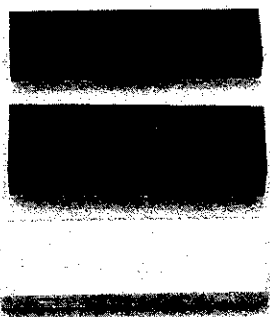


写真⑲ 左がタンセツザイ、右が珪砂

トイシ (民家園備品)

火造り、荒仕上げ、仕上げを終え、最後に刃を研ぎ出すのに使います。トイシは目の細かさなどにより多くの種類がありますが、大別すると、粗砥・中砥・仕上げ砥の3種類になります。トイシを使うのに重要なのは、使用する面を常に平らにしておくことです。使う面がデコボコしていると製品を平均に研ぐことができず、切れるところと切れないところが出てきてしまいます。そうなっては売り物にはなりません。ですので、そうならない

ために研ぐときはできるだけ大きく平均的に
使い、そして使い終わったら必ず手入れをし
て平らな面を常に保持しておくことが重要で
した。



写真⑳ 上から粗砥、中砥、仕上砥

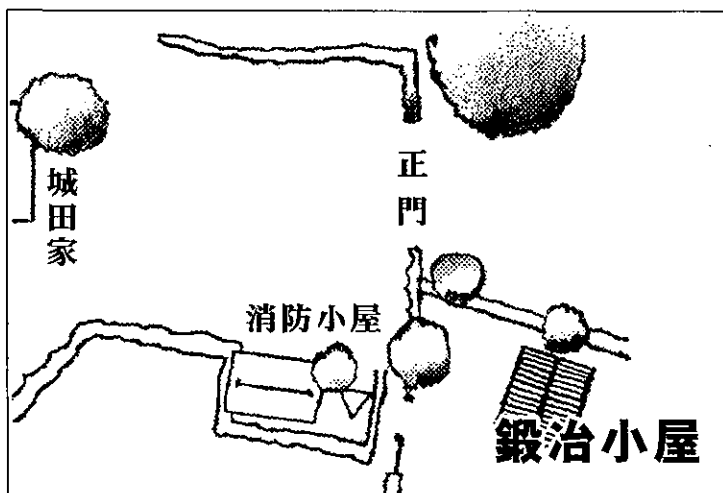
おわりに

今回ここで紹介した鍛冶道具は代表的なものであり、これが全てではありません。紹介した道具も含めて、鍛冶道具一式は民家園に復元された鍛冶小屋の中で展示されています。是非本物を見学してってください。

又、民家園では鍛冶小屋の維持と運用に協力しているグループがあり、毎月活動を行っています。そこでは実際にホドに火を入れ、製品を作る修行などもしていますので、興味のある方は見学にいらしてください。

その他にも民家園では年間を通じて区民向けの鍛冶体験教室や、鍛冶職人を招いての実演なども行っていますので区報をご覧になって下さい。

鍛冶小屋位置



写真撮影

ホド・ホドカキ・ホドツキ・ジュウノウ・ファイゴ・ヤスリ・マンリキ・
タンセツザイ・トイシ

ハシ・タガネ・カツラハリ・トリグチ・セン・イレツチ

清水 襄

新井英之

区文化財資料調査員 新井 英之